

馬台湾総統に書簡

「非核の家郷をめざす」と回答

馬英九台湾総統への書簡

台湾総統 馬英九様

西田 勝

拝啓 突然ながら、一筆啓上致します。

小生は文芸評論を本職としながら、非核平和運動にも参加している一老書生です。

今から20年前、初めて台湾を訪問して以来、台湾の人々の暖かい人情と美しい自然に接し、台湾ファンの一人となりました。

それから、2011年3月11日、東日本に大地震と大津波が襲った時には、ほかのどの地域でもない、台湾の人々からもっとも多い義援金が寄せられ、改めて台湾の人々の暖かい人情に触れ、深い感銘を覚えました。

その人情の一端にも込えたいという動機から、現在、小生が代表を務める植民地文化学会では、貴政府文化部の後援をえて、この3月から東京で講座「台湾をもっとよく知ろう」を開いています。

ところで、この間、一面識を得た林義雄さんが第4原発の建設停止を求めて無期限のハnstを始めたということを新聞で知り、驚くとともに、ここに、あなたに宛てて、林さんの義挙に込えて、第4原発建設の一時停止を行うだけではなく、台湾にあるすべての原発を廃炉にするという決断をされることを求める、この要請書を、同志の水戸喜世子さんに託して、お届けすることにした次第です。

あのスリーマイル島事故が起きたあと、モスクワで平和運動の会議があった時、私たちは、ソ連政府に対して核軍縮だけではなく、原子力発電の廃止についてもリーダーシップをとることを求めました。しかし、ソ連政府からは、残念ながら、第一には同連邦における原発運転のキャリアは日

本よりずっと長く、第二には同連邦の使用する原子炉は黒鉛炉で、日本が使用している軽水炉より構造上、危険度が少ないから問題がないという回答が返ってきました。しかし、その8ヵ月後、チェル

ノブイリ大事故が起きました。

チェルノブイリ大事故が起きた時、日本の電力業界は、同事故は、ソ連政府の主張とは反対に、黒鉛炉を使用していたから起きたので、日本のような格納容器のある軽水炉では事故は考えられないと主張しました。しかし、チェルノブイリ大事故から25年目、今度は日本で、あの福島第1原発事故が起きました。

御存知のように、同事故は、あれから3年、コントロールされているどころか、次々に問題が発生し、絶望的な状態に陥っています。その上、膨大な汚染物質が野積みされ、核廃棄物の最終保管場所も未だに定まっていな次第です。

原発は巨大技術で、極小の部分で不具合が生じても、場所によっては大事故を導きかねません。そして1度、大事故が起きたら、人間と環境に計り知れない損害をあたえます。

もし台湾にチェルノブイリ級の大事故、あるいはフクシマ級の大事故が起きたらどうなるでしょうか。場合によっては、台湾の人々は、あの美しい自然をあとにして、大陸をはじめ周辺の地域に避難するほかはないでしょう。放射能汚染は台湾の大地だけではなく周辺の海域にも及ぶでしょう。

そういう意味で、台湾と地球の運命は、あなたの手の中にあります。総統であるあなたの前には、恐らくさまざまな障りや難問が積まれていると思いますが、ドイツのように、脱原発に向けて賢明な決断をされることを心から願います。

最後に、あなたの御健康を祈ります。

2014年4月28日

賛同者 小出裕章・額額厚ほか107名

落 實 民 主



停 建 核 四

西田教授道鑒

先生と100余人の日本の皆さんが連名した、総統宛の本年5月1日の文書、謹んで拝受、総統に届けました。

このたび、先生が、わが国の原子力問題に対して関心を持たれ、貴重な御提言されたことについて総統は深く感銘しています。この問題については、わが国は出来るだけ早く全国エネルギー会議を開いて各界の意見を集め、解決の方針を立て、

反響

① 自由時報 2014年5月4日付

黄春明 日本友人反核 馬英九に連名請願

（原題：黄春明日友人反核 連署向馬英九請願）

【記者・王揚宇／宜蘭発】作家黄春明の日本の友人、西田勝は多年、非核の主張を掲げ、来台したこともあるが、民進党前主席の林義雄が第4原発の建設中止を求めてハンストに入ったのを座視できず、馬英九宛の請願書を書き、友人に託した。友人は黄春明を訪問した後、郵送、政府が台湾のすべての原発が運転を中止することを呼びかけた。

西田勝は日本の著名な文芸評論家であるだけではなく、多年来、非核平和運動を推進、「平和研究室」を創立している。新聞によって、かつて面識のあった林義雄が第4原発に反対してハンストに入ったことを知り、請願書を書いて林義雄を励ますことを考え、同時に106人の学者や専門家たちの賛同署名をも集め、一昨日、友人の水戸喜代子さんに託した。

請願書は、こう述べている。台湾にもチェルノブイリ、あるいはフクシマ級の重大原発事故が起きれば、台湾の人民は故郷をあとにして、遠方に避難せざるをえなくなるだけではなく、周辺の海域も放射能によって汚染されることになるだろう。台湾政府が第4原発の建設を中止するだけではなく、現在あるすべての原発の運転を停止し、廃炉にすることを希望する。馬英九がドイツと同様に賢明な決定をされることを望む、と。

黄春明は、これらの日本の友人は「良心」のある、すぐれた人々であると褒め、政府は第4原発について凍結とか中止とか、言葉をもてあそんでいる時だけに日本の友人たちの関心に感謝したいと語った。その後、水戸喜世子さんを伴って慈林基金会を訪問、慰問の意を伝えた。水戸さんは今日離台、3日間にわたる訪台の旅を終える。

一步一步、非核の家郷に向かって邁進しようとしています。

御配慮に対して、総統は自分に代わって感謝を申し上げるよう、また、そのほかの皆さんにもよろしくお伝えくださるよう、特に指示がありました。

ここに謹んで御返事します。平安を祈ります。

総統府第一局

2014年5月6日

② 聯合報 2014年5月4日付

日本の反核団体、黄春明を訪問 請願書を送付

（原題：日反核団体訪黄春明 送請願書）

【記者・羅建旺／宜蘭発】日本の反核団体は林義雄を励ますため、そのメンバーの一人、水戸喜世子が昨日、来台、作家の黄春明を訪問した。日本の文学者、西田勝らが連名した請願書を携えてきたもので、馬英九総統に台湾のすべての原発の停止を求めている。

水戸喜世子は日本の物理学者、水戸巖の夫人で、現在80歳。台湾ファンで、反核団体のメンバーでもある。彼女は宜蘭に作家の黄春明を訪ね、ともに慈林基金会に林義雄を訪ねたが、ハンスト後、休養中で面会はできなかった。

水戸喜世子は日本の文学者、西田勝の書いた馬英九総統宛の請願書を帯同、日本国内の大学教授や各界の精鋭など106人が連署、馬英九に対して第4原発の建設中止だけではなく、廃炉を求めている。

請願書は、もし台湾にチェルノブイリあるいはフクシマ級の大事故が起きたら、どういう結果になるだろうか、と問いかけ、もしそうなったら、台湾人民は美しい自然から引き離され、故郷をあとに、遠方に避難を余儀されるだけではなく、台湾本土は勿論、周辺の海域も放射能に汚染されるだろうと指摘している。

黄春明は、署名者の多くは彼のよく知っている人たちで、良心のある日本のすぐれた知識人で、日本だけではなく、台湾、そして全世界に関心を持っている、と述べ、さらに、「原子力発電は、国民投票で決するような政治問題ではなく、科学の問題だ。シアン化合物のような猛毒を持っているものを、食物に適しているかどうか、国民投票によって決めますか？ 当然、不可です」と結んだ。